

対話のこころ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 新 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24607

「対話のこころ」

大学宗教授主任 吉田 新

マルコによる福音書 第二章一三節〜一七節

13 イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集つて来たので、イエスは教えられた。14 そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座つているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がつてイエスに従つた。15 イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に人勢の人がいて、イエスに従つていたのである。16 ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言つた。17 イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

今年六月、アメリカ南東部サウスカロライナ州チャールストンの黒人教会で、一人の白人の青年が銃を乱射し、九人が亡くなる事件が起こりました。犯人の人種差別的な思想が犯行の動機ではないかと報道されています。人種差別撤廃を掲げたキング牧師らによる公民権運動から半世紀がたちます。しかし、なおアメリカではこのような悲劇が繰り返されています。いや、アメリカばかりではなく、わたしたちが住まう国でもヘイトスピーチといわれるような、違った文化、民族の人たちに対してあからさまに差別の言葉が町なかで吐き出されています。わたしは海外で長く生活し、そこで生活している時に、よい思い出もたくさんありましたが、肌の色の違いゆえに、差別的な言葉を投げかけられたこともありました。人種差別はわたしにとって他人ごとではありません。

先の黒人教会で亡くなった牧師の葬儀で、オバマ大統領が演説し、その最後、彼は突然沈黙し、このように述べました。「Amazing Grace」。そして、歌い出したのが先ほど、皆さんと一緒に歌いました有名な讚美歌「Amazing Grace」です。この讚美歌の歌詞を書いたジョン・ニュートンは、かつて黒人奴隷の商人でしたが、後に、黒人奴隷貿易に関わったことに深く反省し、罪人の自分にもかかわらず赦しを与えてくれた神の愛への感謝を歌にしました。

人が人を差別する。その背景は、他者に対する無理解、無関心があります。差別を乗り越えるためには言葉を交わし、対話が続けるしかないように思えます。ただ、おしゃべりをするのではなく、相手が何を求めているのか、自分は何を相手に求めているのか、何が必要か、自分には何が欠けているのかをしっかりと口にして、伝える。時には激しく言い合ったりしてもいい。しかし、対話は続けなければなりません。面倒臭くても最後まで徹底的に話し合うのです。

では、どのような対話をすればいいのか。今日の聖書の箇所はそのヒントがあります。先ほどお読みした聖書の箇所は、イエスと人々との食事の一場面の出来事です。当時の社会では、食事とは食卓を共に囲むことを通して互いの絆を深めることを意味します。わたしとあなたとは心を開き合った友人である。それを確認する行動です。食事が社会的な意味を持っているのです。

イエスは罪人、つまり差別を受けている人々と食事を取りました。「罪人」というのは、わたしたちが現在、思い描いているような心理的な観念ではありません。律法を守らない（守れない）者です。律法を守る人々から、律法に違反する者に対して与えられた蔑称です。イエスはこの罪人たちと積極的に交わった。彼らの苦しみ、悲しみを担い、励まし、また同時に彼らを罪人に定めている社会の体制、支配者を批判する。その彼らとの交わりの行為が、絆を結ぶ「食事」とい

う行為です。

ですから、ラビ達から「あのような人々と食事をするのは、まかりならん」という発言ができません。これは当時の常識からすると、当たり前前の発言です。被差別者と食事してはいけないのです。イエスの行為と発言は排除されている「罪人」を招き、その者たちと食事することによって、当時の価値体系に対して根本的な批判をしています。それは同時に、「自分は正しい者である」と思っている人への静かな批判です。

わたしはこのイエスの言葉は、イエスの対話の姿勢をはっきりと表していると思います。この言葉を聞いた人々、特に罪人とされている人々は、自らが受けている差別をイエスは否定していると気付くでしょう。この言葉を聞いた人々の喜びは、どれほどのものだったか想像に難くないと思います。と同時に、イエスはイエスを批判したものに對し、彼らを徹底的に否定してはいません。自分だけが正しいと思っている者に対して、別の視点で物事を見ることを促しています。

本當の対話とは、相手の意見を否定し、それを封じ込めることではないでしょう。まずは新しい視点を相手に促し、それに気付いて、その結果、相手が「変わる」ものだと思います。人を無理やり変えることはありません。

心には扉、ドアがあるといます。しかし、「心のドア」は普通のドアと少し違いがあります。わたしたちの「心のドア」には内側にしかドアノブがありません。ですから、相手の「心のドア」を無理に開けることができません。

相手の「心のドア」を開けるためには、どうすればよいのか。わたしたちは待つしかありません。まずは、自分の「心のドア」を相手に向かって開き、自由を尊重し、そして待つしかありません。イエスがわたしたちに教える「対話のこころ」。それはわたしたちの「心のドア」をまず開くこと。信じて待つこと。そうすれば、差別する世界から、わたしたちは解き放たれます。まずは一歩、自分の「心のドア」を開いてみましょう。